

〔紹介〕

台湾における検査の実状について

三原赤十字病院 臨床検査部生理検査室

児 玉 昭 信

わが国に最も近い外国の一つであり乍ら、外交関係や日台航空路も断絶という不幸な状態となつている台湾の臨床検査について、小児脳波がとりもつ縁で、過去6回訪台して、見聞したことをもとに紹介することにした。

人口1,600万の台湾には、台北市医事検査技術協会と、台湾省医事検査技術協会（台南市）という、二つの技師会があり、国外との交流を含めて、実質的にひろく活躍しているのは、前記の台北市の協会である。この台北市の協会は現在のところ、約50名の医学検院（日本での私立検査センター）経営者が基本会員となつて、協会の運営にあたっている。その他、約200名の検院および医院（日本での病院）勤務者が普通会员として加入し、講習会や研修会を開いて、検査技術の向上をめざしている。さらに、年1回ではあるが、「臨床検院」という会誌も発行している。

この会誌は、すでに4回発行されていて、本年中には第5巻が発行される予定であり、この会誌の配布は会員のみに限らず、ひろく台湾の臨床医にも配られている。従つて、臨床医に対しては、内外の新しい医学検査を認識してもらう重要な役割をはたしており、検査技術者にとつても、国立台湾大学検査技術系（技師学校で1学年15名）という、ごく一部の教育機関の学生を除き、大多数の検査関係者の教科書でもあるという重要な意義をもつ会誌である。

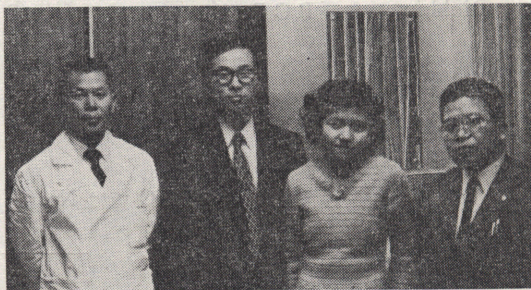
現在の台湾では、検査技師の養成は前記台湾大学の検査技術系が唯一の教育機関であり、これは台湾大学附設医院の検査スタッフを養成するのが、せいいつばいの状態であつて、実際には、検院や医院に勤めて学べという徒弟制度が現状である。パラメディカルで教育機関や資格が確立されているのは、護士（日本での看護婦）ぐらいではないかと思う。看護学校は公私立ともに多く、とくに宗教団体の経営によるものが多いように見受けられた。したがつて、検査・レントゲン技師の資格制度は、現在のところ確立されていないが、目下、関係当局

へ請願運動を続けており、近い将来、実現されるものと思われる。

このように、資格制度が確立されていない現在では、協会のはたす役割は重要であるが、創立以来、協会の発展に心血を注いでこられた、周晋煜前理事長、黄進德理事長をはじめとする役員の努力が、今日では、着実に成果をあげつつあり、同慶のいたりである。その一端において、日本衛生検査技師会も正式に交流を決議している、会誌の発送、ならびに資料の提供等をはじめしているばかりでなく、人事の交流も活発におこなわれている。

すなわち、田立会長、鈴木副会長、宮島元常務理事、内呂元學術委員をはじめ浦辺幹雄技師、岡島次郎技師、不肖、私をふくめ協会の招聘をうけて台北で講演させていただいている。一方日本の技師会が招聘して、周晋煜前理事長、林財、黄栄華、劉長寿、蔡聡明の諸先生が来日されている。

現地できくに感じたことは、学問に対する意欲や情熱が旺盛なことであり、われわれも今一度反省してみたい。1昨年3月、台湾大学小児科、沈友仁副教授の招聘をうけて、同大学医学院で、「小児脳波における患児の扱い方」と題して、講演させていただいた際のことであるが、日本の一技師の話でもあり、テクニシャンの研修会であらうと軽い気持ちで臨んだところ、小児科の陳主任教授をはじめ、医局の諸先生がたも終始熱心に耳を傾け



写真左より台大沈友仁副教授、岡山日赤青山技師、台大脳波技術員、筆者

てくださり、また会場のあちこちでメモをしている光景を見うけたり、ランランと輝やく瞳に圧倒されて、予定時間をオーバーして話したことを昨日のように想い出すのである。

つぎに検査の内容については、一般・血液・血清・生化学・細菌・細胞診にいたるまで日本と全く同様におこなわれている、検査機械や試薬等については、日本製品も多く使われているが、大規模なオートメ化は、まだなされていないのが現状である。しかし、日本と違うところは心電図・レントゲンも開業医の依頼を受けて検診院で実施されていることと、心電図の判読できる医師が少ないため、大学病院の専門医に判読してもらっている点であり、脳波にいたっては、人口約180万の台北で従来、台湾大学神経科、台北鉄路医院、謝徳仁診所と小児脳波第1号の南昌検診院の数台しかなかったのであるが、昨年3月、岡山日赤の青山技師らと台湾大学小児科

を訪問した際に沈副教授の説明で、小児科専用の脳波計が購入されたことを知った程度で、今日でも余り普及していないのが実状である。したがって、当然のこと乍ら、脳波の判読医は少なく、とりわけ小児脳波では前記の沈副教授のみと聞いている。米国ペンシルヴァニア大学で研修されて帰国された沈副教授の活躍が期待される所以である。判読方法も、多忙なためもあつて、沈副教授が脳波記録を見乍らテープに英語で録音されて、そのテープを再生しながら技師が成績書にタイプを打つという方法でおこなわれている。

このように、多くの問題をかかえている現状のなかで驚いたことは、若い技師は自国語いがいに「英語」も出来る人が多いと言う事実である。国際交流を深めてゆくうえに大いに役立つとともに、検査技術のレベル・アップに結びつく重要なことであるだけに、心から拍手をおくりたい。